

山古志から被災地、そして全国へ

～ 震災からの復興地域モビリティ&地域コミュニティ確保の「ノウハウ」紹介します ～

今回の趣旨に賛同頂き、ご協力頂いたのは以下のお二方です。以下編集者Nとお二方の対談形式にて、紹介させていただきます。

(社) 中越防災安全推進機構 山口壽道様 (以下文中 山口氏)

NPO 中越防災フロンティア 木村浩和様 (以下文中 木村氏)

地域全員参加で走るクローバーバス ～新しい公共交通の姿を求めて～

(<http://www.mlit.go.jp/seisakutokatsu/soukou/soukou-magazine/backnumber/12.pdf>)

平成16年の中越地震による被害を受けた新潟県旧山古志村で、廃止となった路線バスに替わる住民の足として、「クローバーバス」を運営しています。

生活交通の確保を地域全体の問題としてとらえ、地域内のほとんど全世帯(97%)がNPOの会員となることにより、地域の自由な発想で地域特性を運営に盛り込むなど、地域が一体となって生活交通を確保しています。

上記平成21年9月のメールマガジンにて、旧山古志村における「クローバーバス」の取り組みを紹介させていただきました。上記URLでは、地域一帯となった取り組みに加え、将来的に地域住民自らの運営・運行を目指し、バスの運行・保守管理への地域人材の活用や、最大5年間限定でのNPO中越防災ネットワークによる運営について紹介しています。是非最初にお読みください。



対談 ～被災地そして全国へのメッセージ～

編集者N: クローバーバスは、ほぼ全世帯と協同、地域住民自らの運営を目指す、5年間限定のNPOによる運営、地域内人材の活用といった他の地域にはない特徴的な取り組みをされています。地震からの復興の課程で、この「クローバーバス」という地域のモビリティ確保の取り組みが行われたきっかけは何でしょうか。

木村氏: これまでも路線バスの廃止が危ぶまれる中で、中越地震を契機に路線バス廃止の方向性が決まっていました。旧山古志村の方々には『帰ろう、山古志へ』の合い言葉の元、元の地域での復興を強く希望されていました。そういった状況の中、中越地震被災地の復興を果たしていくためどのようなことが必要か、地域の大学や専門家、志ある外部の人による議論・研究の場を形成し、検討を進め提言をまとめていきました。この提言においてクローバーバスのコンセプトが提示され、その後地域住民も交えた「山古志・太田地区生活交通協議会」を開催し、提言するだけでなく地域の方への協力要請等も行い実行に移していきました。(別紙1: クローバーバス運行までの経緯)

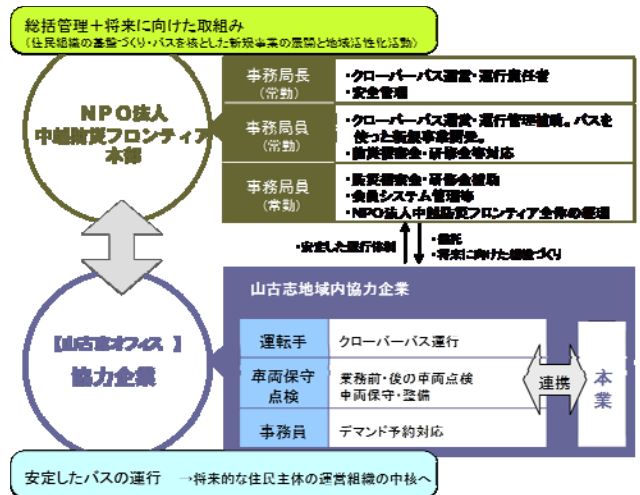
山口氏: 地域住民の想いの実現にむけた取り組みにおいて、行政側と地域住民側という2つの極に加えて、地域の大学やボランティアなどの行政でも住民でもない第三極、いわゆる中間支援組織の活動

が重要でした。さらに、考えるだけではなく『活動』する第三極の力は大きいと考えています。

編集者N：NPO 法人中越防災フロンティアによる運営が5年間限定（H21～H25）とされています。地域の自主的な運営・運行を目指されている理由は何でしょうか。

山口氏：いつまでも、永続的に支え続けることは難しい。現在支援をもらっている中越地震大震災復興基金も被災から10年間（H16～H25）と期間が区切られています。

基金の期限はわかっていたため、クローバーバスの構想の最初の段階から、持続可能な取り組みにつなげる地域の自主的な運営・運行を目指すことを前提に地域の方々へ説明してきました。現在のNPO法人中越防災フロンティアによる運行もそれに向けたステップと説明しています。そのため、運転手やバスのメンテナンス等において地域資源の活用を行ってきましたし、ルートや頻度等バス運行の詳細を決めていく中でも、あれもこれもと言った要望ではなく、優先的に取り組むべき内容や我慢すべきことなどトレードオフの議論を地域の方々で行ってきました。



木村氏：地域の方々には年間5,000円でNPO法人の会員になって頂いています。運賃は頂いておらず、クローバーバスを運行するための費用としてNPO法人の会員費のみでは困難です。中越地震大震災復興基金と長岡市からの支援と合わせて運行しています。しかしながら、現時点で地域の方々が会員という形で参画することで、地域住民のバスに対する意識は大きく変わっています。地域の方々の要望や議論を踏まえて運行しているため、利用者の満足感や利用者数も路線バスの頃に比較して向上しています。また、路線バス廃止前に路線バス運営企業に支援していた規模の7、8割程度で運行を可能にしています。今のこの取り組みを一つの助走にしながら、地域の自主的な運営・運行につなげていきたいと考えています。

編集者N：地域における『合意形成』が難しいとよく言われますが、地域住民の97%の方々と共に活動されています、なぜこのようなことが可能だったのでしょうか、地震があったためでしょうか。

木村氏：旧山古志村では約1200人の住民(平成22年国税調査速報)がいる中で、7、8割の方はクローバーバスに乗りません。それでも賛同頂いている。そこに至るまで、地域に足繁く通い趣旨に賛同頂きました。顔の見える関係の構築が重要と考えています。

山口氏：地震があったことは大きな要素です。「帰ろう、山古志へ」という旗を掲げ、旧山古志村から全村避難、全村復帰を目指していたことがベースにあります。しかし、それだけではありません。中山間地に戻るためには地域の足の確保が必須。しかも、その取り組みが持続可能でなければ、いつか中山間地から地域の足が無くなり、地域から人がいなくなる。『持続可能な取り組みのために何が必要か』、ということがクローバーバスの企画では重要な視点でした。

編集者N:持続可能な取り組みを行う上で、地域のほぼ全員の方が参加することが重要なのでしょうか。

山口氏:中越地震発災の翌年(平成17年4月)には、旧山古志村が長岡市と合併することは決まっていた。行政の効率化は時代の要請であり、抗いがたい。その中で、山古志のような中山間地の人口の少ない地域の意見が伝わる、行政に対する発信力を高めるためにはどうしたらいいか、その答えが『全員参加』。地域の総意は重い。地域のモビリティ確保には行政面の支援・理解が必要であり、地域からの発信力は欠かせないと思っています。地域の声が無視されることなく、発信できることが、山古志に住み続けることために欠かせないことを理解頂いたのではないか。

今クローバーバスを必要とするお年寄りや子供たちをバスを利用しない世代が支える。今車で移動している住民もいずれ運転できなくなり、誰かに支えてもらう。この地域で持続的に住み続けるためには、将来誰かに支えてもらう、今必要なくとも地域全体で支え合う仕組みがどうしても必要となる。持続可能な取り組みには、地域の先輩であるお年寄りや次世代を担う子供たちを敬い支えるといった、地域コミュニティの確保が必要と考えています。

編集者N:運行を開始したH21年7月から2年半、折り返しを迎える中で地域の方々による持続可能な運営に向けた取り組みはどのように進めて行かれるのでしょうか。

木村氏:まだ地域の方々の意識は完璧ではありませんが、地域の若手の集まり(山古志の明日を考える会)で議論したり、毎年行っているクローバーバスの各集落への説明でも意識を持ってもらう様に働きかけています。当然行政側である長岡市との支援方策に係る議論や現在のクローバーバスを課金制にする等仕組みを変える点があるかどうかなどを検討しているところです。

山口氏:持続的な運営には、地域が自由な発想で検討し、ありとあらゆる手段を模索し継続できる仕組みを考えることが求められています。山古志名物の闘牛等の観光やイベントとの連携、通学支援との連携、農業の6次産業化の取組との連携、買い物支援との連携等々、地域一体で取り組めることはいろいろあります。このため、クローバーバスのモビリティ確保の取り組みに限定することなく、特区的な取り組みも模索していく必要があると考えています。(別紙2:持続可能な取り組み及び特区的な取り組みのイメージ)

編集者N:地域の合い言葉、第三極となる中間支援組織の存在、地域の自立を指向、顔の見える関係、行政への発信力、世代間の支え合い、中越地震からの復興の取り組みにおけるキーワードをいくつか紹介頂きました。そのほか、復興の一つとして被災地におけるモビリティ確保において注意すべきこと、重要なことなどありますか。

山口氏:復興の取り組みは地域によって異なります。中越地震からの復興も手探りであり、いくつかの『成功』も努力による『偶然』の産物でした。しかしながら、我々は中越地震からの復興を経験してきたことにより、地域の努力が『必然の成功』につながるノウハウを得ることができたと考えています。山古志で行ってきた『中越モデル』に近い形で適用できる類似の地域もあると考えていますし、具体的に東北の広田半島にお住まいの皆さんに提案もさせて頂いています。(別紙3:支援プロジェクトのイメージ)

類似の地域でなくとも、我々と一定の期間、協働作業を続けていくことでノウハウをお伝えする

ことができると考えています。逆に 2, 3 日の講義形式で取り組みをレビューしてもなかなか伝えることが難しいと感じています。中越にはこれまで取り組んできた組織があり、人がいます。是非、ご要望があれば協力させて頂きたいと考えています。

編集者 N : 中越には『組織』がある、とおっしゃっていましたが、被災地において役に立った『組織』とは具体的にどのようなものでしょうか。

山口氏 : 中越地震では地元の大学が、識者として活動・支援したことのみならず、学生さんをボランティアを始めとして、いろいろなかたちで被災地に入れた。この『支援活動』が大きな力になりました。我々が中越の経験から得たノウハウも、そういった地域で真に活動する方々へお伝えすることができれば、より力になると思います。おそらく東北など現在の被災地においてもそういった方々が被災地の方々と一体となって協働作業を続けてゆく仕組みづくり、組織づくりは重要になってくると思います。そういった組織づくりでも私たちのノウハウの提供という面でご協力できる部分はあると思います。

また、中越では、復興基金による特徴的な支援制度として『地域復興支援員』があります。復興の初期に活動したボランティアの皆さんや志ある外部の方々が、そのまま長期にわたり中越の被災地に滞在し、地域住民と行政等との橋渡し役を担っています。復興と一緒に進める顔が見える、息の長い支援です。被災地の方々からも非常に信頼され、好評ですし、行政側や我々のような中間支援組織にとっても被災地の方々の本当の様子やニーズなどがわかり助かっています。是非東北でも導入をして頂きたい制度です。

(地域復興支援員概要 : <http://www.chuetsu-fukkoukikin.jp/jigyuu/01/028/01-028-naiyou-01.pdf>)

編集者 N : 被災地以外の地域に対して、地震からの復興の経験が活かされることはありますか。

山口氏 : 地域にとって地震被害は大きなインパクトですが、地域の今後を考えるという意味では、地震以外でもインパクトはあると思います。例えば路線バスの廃止の動きも、地域生活へ与える影響という点では非常に大きな問題であり、地域の将来を考えるきっかけだと思います。

中越の復興において重要であった、地域との顔も見える関係やしっかりした対話、地域の自立と持続可能性の考えは重要かと思います。山古志でも大事なもの・無くしてはいけないものが何か、といった地域の将来について真剣に議論してきました。地域の文化や捨てられないものを真剣に見つめ直すことがコミュニケーションを図るきっかけになるのではないかと、その地域におけるコミュニケーション、地域のコミュニティの確保が地域のモビリティ確保には重要と考えています。

また、視点は違いますが、復興について日本災害復興学会において、学術的なレビューも行っています。そこでも、復興に向けて必要となる地域のポテンシャルなどについて議論しています。地域の持続可能な活性化、地域モビリティの確保を図る上でも重要な視点もあるかと思いますが、関心のある方はHP等ご覧頂ければと思います。(日本災害復興学会 : <http://f-gakkai.net/>)

編集者 N : 様々なメッセージありがとうございました。

最後に ～ ご関心のある方、興味のある方は ～

今回の対談により、復興への動き、地域のモビリティ確保の取り組みにおいて、持続可能な取り組みを追求する重要性、地域コミュニティを確保し、地域の自立と地域の総意を形成する重要性、持続的な地域経営のツールとして地域が独自で運営していくために必要な特区的な仕組みの必要性等をお聞きすることができました。こういった視点が被災地の今後のモビリティ確保の取組及びその他の地域における取り組みの一助になればと思います。

今回ご協力頂いたのはお二方より、被災地における活動やこれまでの中越における取り組みに興味のある方がいらっしゃれば、是非お問い合わせくださいとお聞きしております。以下にそれぞれの HP 等を紹介させていただきます。

【お問い合わせ先】

社団法人 中越防災安全推進機構 山口壽道様

<http://c-bosai-anzen-kikou.jp/>

〒940-0082 長岡市千歳1丁目3番85号 ながおか市民防災センター2F

[tel] 0258-36-8141 [fax] 0258-86-7789 [e-mail] info@c-bosai-anzen-kikou.jp

特定非営利活動法人 中越防災フロンティア 木村浩和様

<http://c-bosai-frontier.jp/communitybus/outline.html>

〒940-0861 新潟県長岡市川崎町2249番地1

TEL&FAX 0258-31-8110 MAIL info@c-bosai-frontier.jp

【ご参考】

今回のメールマガジンでは、山古志における取り組みについて詳細な説明を省略させて頂いている部分があります。そのため、中越防災フロンティアホームページにリンクされている、クローバーバスの取り組みに係る詳細な説明について、以下のURLを紹介いたします。

- ・中山間地域の持続可能な公共交通についての考察

<http://www2.hokurikutei.or.jp/lib/shiza/shiza08/vol20/regional-index/index.html>

<http://c-bosai-frontier.jp/communitybus/report.pdf>